

# 恩師氏原鏡子先生を偲び奉る

宮崎 しか

昭和十三年六月六日朝、いつもの如く幼稚園に出勤しました處、玄關にて小使が、先刻〇〇幼稚園からお電話でして藤原先生がお亡くなりになり螢ヶ池にて告別式ですこの事、私は藤原先生といふお名前がさうしてもわからず舊知の方々のお名前を次から次へきたごつても思ひ出せませぬ。依て再び〇〇幼稚園にお電話せしにそれは神戸愛兒園の望月先生におたづね下さいこの事、はてなご首かしげつゝ愛兒園に電話しました處恰も望月先生御在園にて、御自ら電話におかゝり下されてのお話によれば、それは全く思ひもよらぬ恩師氏原先生この御事、熱海云々承つてはもはや其後の御言葉耳にも入らずたゞ驚きに茫然自失せむばかりでした。しかも御追悼會は昨五日に螢ヶ池のお寺でお済ましになつたこの御事、まあ何といふ悲しい御事です。御生前あゝまで可愛がつて下さつた私になぜお知らせを頂かなかつたのでせうか、私は残念でゝ堪りません。悲しくてゝ堪りません。早速御令息均一博士に御弔問の

手紙をこ存じて、それを認むる勇氣が出ません。宅へ歸つて主人にも此事を話し共に涙にむせびました。私はせめてもの心持ちにて早速恩師氏原先生の御靈位を白紙に認め御佛壇の中におまつりして美しきお花、お好きであつた甘いものなごくさん、お供へいたし、朝に夕に懇ろにお仕へ申上げて居ります。はや明日はお初の御命日となりませぬ。嗚呼

回顧いたせば、今より四十二年前明治二十九年四月、私が父につれられて初めて先生の御膝下に御教導仰ぎしは、先生お年三十八歳私十八歳の春でした。先生には誠に御婦徳高く貞節にして、御良人ましまさぬ御家庭にあられて、其頃中學御在學の御令息様の御教育に、且又義理ある老婦人様の御看護にお二人前もお三人前もの重荷を負はせられ、謹厳力行よく御精勵遊ばされし御姿、今尙眼前に髣髴さしてお懐しさに堪へませぬ。爾來四十年餘りの年月を、或は東京本郷のお住居に、或る時は別府の御令弟様のお宅

に、主人共々お訪ね申上げ、最近は昨年十一月上京の際、熱海の御別邸に主人と弟と三人連れにて御訪ね申上げました。これが永久のお別れにならうとは夢にだも思はざりし御事にて、返すがへすもお残おしき極みで御座います。熱海にお訪ね申上げて辭し去らむとせざる時、懇々御門前迄御見送りを忝ふしました際、覺束なき御足許にて、私の弟が手をのべますと、大丈夫で御座いますとて植木なごお傳へ遊ばしての御歩行、何とも申上様ありませんでした。せめて一夜をこの御親切を無にいたし歸へりましたもの、あの、あのお姿、今も尙胸に迫り堪へがたき思ひがいたします。其後も幾音信、いつまでも御慈愛の数々悲しき思出の数々。嗚呼

昭和九年中絶して居りました私が再び保育界に身を投じましたを非常に喜び下さつて、色々深き御注意等賜りました中に、あの御高齡を以て(七十六歳の御時)文部省夏の講習に御出席遊ばされ、倉橋惣三先生の御講演の筆記(お話の心理)及唱歌、遊戯に付ての御高見等、最懇切に御教示下されしかもお話についての御謙讓なる御文意私は唯々恐入るの外御座いませんでした。左に之を。

右倉橋先生の御講演の概要を御参考<sup>○</sup>に供し候<sup>○</sup>昔時<sup>○</sup>御指導<sup>○</sup>申上げし<sup>○</sup>話方は<sup>○</sup>誤れる<sup>○</sup>の甚しき<sup>○</sup>ものに<sup>○</sup>候間<sup>○</sup>よろしく<sup>○</sup>御改め<sup>○</sup>下され<sup>○</sup>度<sup>○</sup>御託<sup>○</sup>旁<sup>○</sup>申上<sup>○</sup>候<sup>○</sup>云々<sup>○</sup> 遊戯については

毎年東京女高師に於て開催せらるゝ(日本幼稚園協會)戸倉ハル先生の遊戯講習は、幼児の心理状態及其活動性に適する點を研究せられしものにて、本年度講習に出席せられし神戸の保姆様あらば就て教を受けられたし。若し不可能なれば來年は貴園職員の中より受講に上京相成度希望致候云々。いつく迄も教へ子として熱心に御導き下さる先生の御心情の尊くも勿體なく、唯々涙せし事にて終生忘るゝ事能はざる感激であります。あの御高齡を以て炎暑焼くが如き折柄、御受講遊ばさへ實に驚くべき御精力と御熱心とでありますのに、それを昔の教へ子に委しく御傳授遊ばして下さる御愛心に至つては、實に師の恩の海よりも深く山よりも高きをしみじみと難有感泣の外は御座いませぬ。

尙昨年十一月十六日付おはかきたまはり「私も老い候事にて何か粗末ながらかたみの品差上度、柄合昔物なるも洗ひ張り仕立直し差上度袖丈短かく縫込みを出さば四寸三相成候が如何や、御寸法等御知らせ下され度此段御返事を待つこの御手紙を頂きましたもので、私は今から、おかたみなご、仰せられては悲しくなります。さうぞもつゞく鶴龜の御齡重ねさせられますやうに御返事申上げました處、少し考へる處があるから一寸見合す旨の御返事あり、又暫らくしてからやはり送るからにてお召しの御袷を御送り下さいました。柄合がじみだから仕立直しても今は着られまい

から老いてから着よきて其儘御送り頂きました。私は泣けて泣けてしかたがありませんでした。此時既に御天壽をおささり遊ばしてゐらせられたのでせうか、今にして思へば、越えて本年二月十五日には、童話「梅子子供」の櫻子供」の御二作に添へて梅干飴を御送り下さいました。梅干飴を小包の中から発見しました時、私はほんさうに之はさかさ事だと思ひました。飴に至つては御老人の御口に會ふべく私よりこそ御送り申上ぐべきでありましたのにと思へば唯々勿體なくて、却つて早速には拜味いたす氣にもなれませんでした。四月七日には「摘み草」のお童話を御送り下さいました。今にして思へば日本に於ける幼稚園の先覺者としての御使命を最後迄御果しになつたもの、誠に尊く床しく存ぜられます。私は去五月中旬亡き母の一周忌法會に郷里へ歸りました節、氏原先生へきて出石焼の一輪イケを持つて歸りました。早速御送り申上げてと思ひましたが、何かお好きなお菓子でも添へてと思ひつゝ園の方が大變忙しかつたものですから延引してゐまして残念な事をいたしました。今はおよろこび頂く主もおはさず、純白の出石焼には折しも亡き恩師のみたまにさゞげよきてかたゞ一本、庭に咲ける白百合の花がいけられて御佛前にさみしくも床しく香つて居ります。四十餘年の永き年月を、母の様においしくしみ頂いた恩師氏原先生今はこの世におは

しまさず、いかにお慕ひ申上ぐとも最早再び御目にかゝるすべもなく、たゞ悲しさに泣き寂しさに涙いたすのみで御座います。

せめて亡き恩師の御人格を御遺稿を貴紙を通じて同じ道の爲めにお盡しの保姆様方に讀んで頂いて、このやる瀬なき思ひを癒やし度否御手向けの一端さいたし度拙きを願みすこゝに筆をさりました。合掌(十三年六月二十八日記)

御影幼稚園長

(三〇頁より續く)

ふ事だけによりAの様子は總ての點がすつかり變つてしまつた。Dが誘へば誰の遊びの仲間入りも出来る様になつたし、製作等には大へんな興味を以て夢中になつてする様になつた。自信のある事にはごんな事にも手を出す様になつた。夏休み前には面白い遊びを自分で考案して皆を入れて遊ぶ様になつた。何か考へ出すさいつでも素晴らしいものが出来る。「Aさん入れてね」皆がAを求めて来る様になつた。皆の中に自分の存在をはつきり認められれば認められる程、Aはしつかりした歩き方をすゝめてゐる。一年前の事を時々思ふさ本當に嘘の様だ、よくもこんなに早くこゝまで来たものだといふ事を不思議に思つてゐる。